「行人」読書メモ

長野家　　父--------母　　岡田－－－-兼
　　：
　　―――――――――――　　三沢　　女
　　重　　二　　一
　　郎　　郎　＝　直　　佐野-----貞

H

この作品は、大正元年１２月から筆を起こしたが、執筆は遅々として進まず、神経衰弱や胃潰瘍のため中断、ようやく、２年１１月続編の「塵労」を完成。
この作品は、前作「彼岸過迄」の「須永の話」を発展させている。
一郎と直の夫婦関係に、漱石が直面している問題を設定する。
近代的な知識人の懐疑と深い苦渋が捕らえられている。周囲のさまざまな人に囲まれて自己を偽り、孤立する主人公が調和を求めて苦悩の末、ついに周囲の虚像を自分も分け持っていることを悟り、自分の罪に気付くストリーを描いている。
三部作には見られない優れた追求が示されている。
「門」について厳しい批判をした正宗白鳥は、「行人」については、「他人の心の暗さ、醜さを傍観者的に描いているというのでなく、これらに現れているいろいろな疑惑は、作者自身の心に深く根を張っていたのではないか」と、肯定的に捉えている。

大学教授の長野一郎は妻であるお直の心がつかめないと苦労する。一郎はお直が実は弟の二郎を愛しているのではないかと疑い、和歌の浦への旅行中、一郎は二郎にお直の貞操を試すよう依頼する。理知的であるがゆえに妻の心が見えないと苦悩する一郎は、やがて同僚の H さんと旅に出る。空回りする一郎の自意識に近代人の他者の問題が凝縮される。「妾なんか丁度親の手で植え付けられた鉢植えのようなもの」というお直の言葉に、漱石の女性認識の新たな展開が感じられる。

あらすじ
妻・直の心がつかめず苦悩している大学教授の長野一郎は、家族旅行で訪れた和歌の浦で、弟の二郎に奇妙な相談を持ち掛ける。妻の直と宿で一泊し、貞操を試してくれと言うのだ。（兄）。
断るも、結果的に義姉と嵐の一夜を過ごすこととなった二郎は、東京へ戻ると何事もなかったことを報告するが、信じようとしない兄との仲は気まずくなり、やがて家を出るこ

とにする（帰ってから）。
　精神の安定を失い、奇行がひどくなる一方の一郎に対して、二郎は兄の親友のＨさんに依頼して旅に連れ出してもらい、その原因を探ることにする（塵労）

「行人」　三十五、三十六より
兄・一郎から嫂との不倫を疑われる弟・二郎。その二郎と嫂がよりによって、嵐の夜、旅館の一室にふたりだけで向かい合う。交通は途絶え、電話線も切れ、そして停電の中、娼態を見せるがごとき嫂のふるまい。どうなる二郎？、新聞小説かとして、人気を十分に意識した漱石の、エンタテイメント性が炸裂した場面だ。

ストーリー
「友達」
　長野二郎はお手伝いのお貞の結婚相手を見るために、関西の旅行をします。そのついでに友人の三沢と会う約束をしていたのですが、三沢は胃を悪くして入院していました。二郎は、三沢を見舞うために病院に行くうちに、患者である美しい女に心惹かれます。三沢は入院する前のその女に酒を強要したことがありました。三沢は退院する前に、精神を病んでいたある娘さんの話を二郎にします。
「兄」
　二郎の兄で学者の一郎が母と妻である直を伴って大阪にやってきます。四人は観光の為に暫く滞在したのですが、その折、一郎は二郎に対して、妻直の貞操を試して欲しいと依頼します。二郎はいったん拒否しますが、とうとう直と二人で旅行をする羽目に陥ります。日帰りのつもりが、台風のため二人は一緒に泊まることになったのですが、結局直の心は掴めず仕舞でした。二郎は直の貞操を疑う必要はないと報告し、くわしくは東京に還ってからと、一郎に約束します。
「帰ってから」
　東京に還ってからも、二郎は一郎に詳しい報告をしませんでした。一郎から強く求められましたが、二郎は彼の追求を避けるような態度をとりました。すると一郎は、お前は父と同じ軽薄な男で信用できないと激怒します。それ以後、家の居心地が悪くなった二郎はついに兄夫婦と両親が同居する実家を出て、下宿暮らしをすることを決意します。
「塵労」
　二郎が家を出た後、一郎の精神状態はますますひどくなるばかりでした。直も二郎の下宿を訪ねて、自分は立ち枯れになるかもしれないと訴えます。二郎は両親と相談し、一郎を親友Ｈに頼んで、強引に旅行に連れ出してもらうことにしました。Ｈは手紙で兄の苦悩を詳しく綴ってくれました。一郎は旅行中、自分は絶対だと主張し、このままだと死ぬか、気が狂うか、宗教に入るしかないと語ったのです。

読みどころ

様々な愛の形を描いたのが漱石で、その中でも「行人」は傑出した作品です。

「行人」とは通り過ぎるだけの人、あるいは旅人と言ってもいいでしょう。どれほど愛しあっても、人と人との関係は「行人」であって、相手の気持ちを本当に知ることなど誰にもできないといった、漱石独特の人間観が作品の底辺に流れているのだから、これほど寂しい作品はないでしょう。

まず「行人」の一人目の話が紹介されています。

語り手である長野二郎は、友人の三沢と会う約束をして、大阪に来たのですが、肝心の三沢は胃腸を悪くして入院していたのです。その病院で「あの女」に惹かれたのですが、実は三沢はその女と入院する前に偶然会って、一緒に酒を飲んだことがあったのです。

三沢はなぜ強引に女に酒を飲ませたのでしょうか？

「あの女」は胃を患っていたのですが、三沢に酒を飲まされた後胃病が悪化し、結局入院することになります。三沢も軽症ですが、「あの女」が入院しているのではないかという期待もあって、同じ病院に入院します。ここにも人と人の淡い出会いがあったのです。

自分の身体なのに、其の身体の中がどのような状態なのか分からない、相手の身体がどのような状態かもわからない。そんな恐怖が漱石の中には絶えずあったのかもしれない。もしかすると、自分の身体の中に取り返しがつかない異変が起こっているかもしれないのです。そうとも知らずに、何事もなかったように日常生活を送っているわけで、考えてみれば、これほど恐ろしいことはありません。

自分が制御できないもの、得体のしれない恐ろしいものとして、漱石は「身体」を描きだしたのです。そして、其の身体に闘いを挑み、破れていく姿を描き出していきます。

実際、漱石は生涯胃病に悩まされたのですが、そういった体験を作品の中で見事結晶化させる文章力。やはり、漱石はすごいです。

「あの女」は売っ子芸者として、たとえどこか身体が悪くても決して休む様子もなく、着飾ってお座敷に出るようにしていました。おそらく売られた同然の身分でしたが、売上に貢献できるうちは大切に扱われていたようです。ところが、回復の見込みがないようなひどい胃病を患い、病室でもしばしば血を吐いていたようなので、さぞかし心細いだろうと三沢は思ったのです。

三沢は自分のせいで「あの女」の胃病がこれほどまでに悪化したわけですから、「あの女」のことが気になって仕方がありません。しかし、これだけはどうすることも出来ず、「あの女」を残して退院すると、もう二度と会うことも無いかも知れません。

まさに「あの女」は三沢にとって、「行人」だったのです。留まることも無く、目の前を通りすぎていくだけの人なのです。

三沢は退院が決まった日、「あの女」に別れのあいさつをします。「あの女」はおそらく助からないだろうし、そうでなくとも二度と会う機会などないのです。「ご機嫌よう」と言った女の淋しい笑いを三沢は夢に見そうだというのですが、実は人生とはそういった繰り

返しではないでしょうか。
　この時期、漱石は死を凝視しながら執筆しています。その視点で人生を見詰めなおした時、「行人」＝通り過ぎるだけの人、といった捉え方を否応なくしたのではないか。
　漱石が「行人」という作品に、なぜこのようなエピソードを挿入したのか、実は長い間私にとっては謎だったのです。

　人は人と出会い、何らかの交流をした後に、再び分かれていきます。私たちは自分の身体の中も相手の身体の中もわからないまま触れ合っています。三沢も「あの女」の身体の状態がわかれば、あの時あれほど酒を飲ませることはなかっただろうし、「あの女」も無理に酒を煽るほど飲むことはなかったはずです。
　自分の進退ですらわからないまま私たちは生きているのですから、ましてや自分の心も相手の心ももっとわからないはずです。わからないまま、人と出会い、ある時は人生を共にし、そして、最後まで分からないまま別れていきます。たとえ、結婚して、最後まで離婚をしなくとも、死という別れを避けることはできません。まさに人と人とは「行人」ではないでしょうか。
　私も様々な人生経験を積んで、今ようやく「行人」の深い意味がほんの少しは理解できるような気がします。
　そして、三沢はもう一つ、「行人」の話を二郎に語ります。

　精神に異常をきたした娘さんが、三沢が外出するたびに、「早く帰って来てちょうだいね」と何度も繰り返すのです。その娘さんは嫁ぎ先で精神に異常をきたし、離縁されたのですが、それほど娘さんは淋しくて淋しくてたまらなかったのでしょう。しかし、娘さんの心を誰も理解しようとしなかったのです。
　娘さんは家族の一員として受け入れられたに違いないのですが、彼女にとって嫁ぎ先の家族はやはり「行人」だったのです。
　娘さんがどれほど淋しい思いをしていたのか、誰も彼女の心を掴もうとはしませんでした。精神に異常をきたすほど深い孤独を胸の内に抱えて生きてきたのです。だからこそ、三沢に対して、「孤独を訴える」ように、纏わりつくように、黒い眸で訴えかけ続けたのです。「どうぞ助けてください」と訴えかけられたと、三沢は感じ取っています。
　人と人とのかかわりあいの中で、表面的なそれで満足できる人は逆に幸せかも知れません。しかし、人と深く交わろうとするとき、私たちはどうしてもお互いに分かり合えないという己の孤独と真正面から向き合わなくてはいけなくなります。
　漱石はそうした人間の根源的な孤独を言葉で掬い上げようとするのです。
　三沢はその娘さんの孤独を次第に引き受けたいと思うようになったのでしょう。しかし、娘さんは病院に入れられ、誰に理解されることなく、孤独な魂を抱え込んだまま独りぼっちで死んでいったのです。

「行人」として最後に登場するのが、二郎の兄の一郎です。この一郎は強烈な個性の持ち主、得意な世界観を持った人物として造形されています。私自身は一郎に漱石自身が投影されているように思えるのですが。

一郎は学者であり、頭脳明晰ですが、まじめすぎて頑固で、何事も自分の脳髄を使ってぎりぎりまで考え抜くタイプです。対極にあるのが二郎で、二郎とその父で、実利的であり、世渡り上手ですが、一郎に言わせると「軽薄な人間」ということになります。

一郎には直という妻がいます。お互い相思相愛で表面的には何の問題も起こっていません。ところが、一郎は直の自分への愛情が本当かどうかわからず、それゆえ、死ぬほど苦しみ抜きます。たとえ妻であっても人の心がつかみにくいことを知っている一郎は、直の魂をつかみ取りたいと狂惜しく思うのです。

女の容貌や肉体に満足している人間ならば、これほど苦しむことはありません。実際直と夫婦生活を営んでいるし、直が浮気をしているという事実はありません。それでも不安で仕方ないのは、直のスピリット（魂）をつかんでいないからだと、一郎は思ったのです。

一郎は二郎に向かって、「直は御前に惚れているんじゃないか」と言い、妻の貞操を試してくれと頼みます。

結局、直の貞操はわからずじまいで、二郎はそれをさほど深刻なものと受け取らず、しばらくほったらかしにしておいたのですが、二郎のそうした言動がやがて一郎の激怒を招きます。ついにいたたまれなくなった二郎は家を出る決意をし、一郎に別れの挨拶を言いに部屋に入ったところ、一郎から思わぬ話を聞かされます。

二郎はこの話を聞いて愕然とします。それどころか一郎の精神状態さえ疑ったのです。今、一郎は弟の二郎と妻との関係を疑っているのですが、パラオとフランチェスカの夫の弟、まさに一郎と二郎の関係と同じです。そして、パオロとフランチェスカは兄の眼を盗んで愛し合い、それを知った兄が二人を殺してしまうのです。←（ダンテ神曲、地獄変）

おそらく兄はこの後自分の妻との関係を追求するだろうと、二郎が「厭な疑念」を持ったのも、無理からぬことでした。

世間は不倫を働いたパオロとフランチェスカの名前だけを覚えていて、被害者であるパオロの兄の名前は憶えていないのです。一郎は二郎にそのわけが分かるかと問いかけたのです。

一郎の論はこうです。

自然が醸し出すものと、人間が作り出した道徳とを対比させ、最後には自然が醸し出したものが賛美されるというのです。

さしずめ**恋愛は自然の感情であり、道徳は人間の作ったもの**です。

人を好きになるというのは自然の行為にほかならず、それ自体は善でも悪でもありません。たまたま愛してしまった人が兄の妻であったということで、人は何時、誰を好きになるかわからないのです。

フランチェスカがパオロを愛してしまったということは自然の感情であり、結果、フランチェスカが夫を愛せなくなってしまったということも自然の感情で、本来どうしようもないことなのです。

ところが、世間はそれを不義だと責め立てます。なぜなら、二人は道徳を犯してしまったからなのです。道徳とは社会全体を円滑にするために便宜的に人間が作ったもので、人びとは当然がその時は道徳に加勢するものです。なぜなら、不義を認めたら、家族制度が崩壊する可能性があるから。

たとえば、ワイドショーなどで芸能人の不義を暴き立てるときも、「不倫」＝「悪」と決めつけ、そこに何の番外の余地も挟み込もうとしないのですが、私にはそうした態度自体が思考停止状態のように思えます。

フランチェスカがパオロを愛してしまったということは、夫を愛していないということです。それが自然の感情なのに、愛していない夫を生涯愛している振りをして暮らせというのでしょうか。それなのに道徳は、人に反した行為を矯正させようとするのです。「それから」の代助のように、まさに自然に反したから、自然に罰せられたのだ、という結末を迎える可能性だってあるのです。

夫は夫で、パオロとフランチェスカを不義だと決めつけ、二人を殺してしまったのですが、それは妻を自分の所有物だと決め込んでしまっているからです。「俺の女だ」「俺のものだ」「俺の女に手を出すな」と、よくこうしたセリフを耳にすることがありますが、相手を自分のものだと決めつけた時、その人の心が離れてしまったとしても、きっと気が付かないことでしょう。

フランチェスカの夫にとって、妻は自己の所有物だから、不義を働いた理由で殺すことが出来たのです。そして、世間はその時は夫を加勢し、二人を不義だと責め立てます。

ところが、時が経つにつれ、たとえ殺されようとも愛を貫いた二人の在り方がキラキラと輝き始め、パオロとフランチェスカを賛美する声が永遠となったのです。二人は愛という自然の感情に従ったのですから、道徳を盾に二人を責め立てたフランチェスカの夫よりも賛美の声が大きくなるのには、ある意味では当然と言えるかもしれません。

そして、一郎は結婚という制度では人の心を縛れないことを知っているから、逆に愛する妻の魂を掴みたいと、狂おしい迄に願ったのです。

Hの手紙から、一郎の精神世界を読み取っていく。

（塵労）

ここにきて一郎の苦悩が明かされてくるのですが、一郎が苦しいのは何も妻の心が掴め

ないだけでなくて、その根源のところに、自分の存在すること自体に漠然とした不安があるのです。
　なんのために生きているのか何をしなければならないのか、生きることの目的は何か、自分とは何なのか、それをしっかりと掴まないかぎり、一郎は不安で仕方ないのです。
　その延長線上に、愛する人のスピリットを掴みたいという願望があるのです。しかし、二郎にも直にもそうした一郎の精神世界は理解できません。だから、一郎は孤独で仕方ないのです。この孤独な須永の「淋しいです。世の中にたった一人立っているような気がします」（彼岸過迄）という言葉とつながっている。
（塵労）
　一郎の言葉は非常に迫力があります。おそらく一郎の「恐ろしさ」は読者のほとんどが理解できないだろう。なぜなら、たいていの人がわかろうとするのは、一郎の言葉を借りるならば「頭の恐ろしさ」であり、「心臓の恐ろしさ」ではないからです。一郎が抱えている「恐ろしさ」は頭では理解することは不可能であり、**まさに生きた心臓で体感するもの**なのなのでしょう。
（塵労）
「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか」が一郎の言葉ですが、一郎は神を否定し、自分の頭で全てを克服しようとしています。だから、このままいくと錯乱してしまうしかないというのです。
　一郎は死ぬか、気が違うかのギリギリのところでとどまっているのですが、これは晩年の漱石の苦しみの告白でもあるのです。
「吾輩は猫である」「坊っちゃん」などの勧善懲悪の世界とは全く別個の世界が、ここで開示されたのです。
　一郎は神を否定した限り、「神は自己だ」と宣言するしかありません。
　一郎は「神は自己だ」といい、一方で「僕は絶対だ」とも言っているので、「神」を「絶対」と同義語と考えてもいい。
　自分を無にすることで、万物すべてが自分だから、自分が絶対だと言うのです。そこに咲いている百合の花も、さらさらと音を立てて流れる小川も自分だ。だから、自分が神だと主張します。
　そうした境地にあってあらゆるものに触れるとき、その万物は自分であるから、それが即ち相対なのです。
　この思いあがった心境というよりもむしろその逆で、自然や、この地上に存在するあらゆるものと一体化したいという、一郎の強い願望だと言えます。その境地に達すると、妻が自分を愛しているかどうかなど、世俗的なことに思い悩む必要もなくなります。
宗教を否定した一郎にとって、これしか救いはなかったのでしょう。

　日本人はもともと出家をしたり、隠遁生活を送ったり、旅をすることによって、自己を

棄て、自然と一体化しようとしました。芭蕉はそうした境地を「風流」となづけています。ところが、漱石のそれは、西行や兼好や芭蕉の境地とは一線を画しています。彼らはもともと自我という概念がなかったのです。**自我はあくまで近代が生み出したもの**なのです。自我がないから自然と一体化することが出来たのです。

　それに対して、漱石は徹底的に自我を追求します。一郎も「自己」を何処までも追及しようとしています。自己をギリギリまで追求することによって、逆に万物と一体化する、それが一郎の世界観であり、それ故、一郎はギリギリまで自分の頭で考えて考えて、考え抜くしかありません。

　これは漱石の理想的境地といわれる「即天去私」につながるものではないか。

　そして、Hはその手紙で次のように締めくくっている。

（塵労）

塵労

●1～12 章

春の彼岸の日、二郎の下宿に初めて直がやってくる。

直は一郎との関係がよくない方向に進んでいくと訴える。

一郎と直のことが気になる二郎。

実家では、重や父母までもが一郎の異常を訴える。

二郎は父母と相談し、一郎に旅行を勧めることにする。

●13～17 章

二郎は、一郎と一番親しい H に旅行へ行ってもらうため、

在学中 H を保証人にしていた三沢を介して、H に頼む。

H は一郎に別段変わったところはないと言うが、

二郎の頼みを引き受けてくれる。

三沢は二郎に、一郎のことよりも早く結婚しろと言う。

6 月の講義が終わり次第、兄と H が旅行することが決まる。

●18～27 章

6 月に入り、二郎は三沢に雅楽所へ連れていかれる。

そこには女性が二人いて、一人は三沢と結婚予定の女性、

もう一人は三沢が二郎の結婚相手に進める女性だった。

二郎はその女性が気にはなるものの、

一郎のことが気になり、女性のことまで気が回らない。

旅行の前、二郎は H と会い、旅行中の一郎の様子を

できるだけ詳しく書いて知らせてほしいと懇願する。

H はその必要性に疑問を示しながらも同意する。

●28～52 章

一郎と H は旅行に出発。
旅行に出てから 11 日目、H から二郎に重い封書が届く。
そこには旅行中の一郎の詳しい様子と、
一郎に対する H の思いが綴られていた。
H は一郎が就寝中に手紙を何度かに分けて書いた。
旅行中、一郎は自分が抱えている悩みや苦しみを、
何度も繰り返し H に告白した。
「行動と目的が一致しないことほど苦しい事はない」
「人間全体の不安を自分一人に集めている」
「僕の前途は死・気が違う・宗教に入るの 3 つだけだ」
「僕は生死を超越しなければダメだと思う」
「僕は迂濶で矛盾でもがいている馬鹿だ」
「どうかして香厳（一切を棄てた昔の僧）になりたい」
H は一郎を救いたいと考え、様々な話やアドバイスをした。
そして二郎に向けて手紙を記した。
「彼は凡庸な私に頭を下げ涙を流すほどの正しい人だ」
「彼をただの気難しい人と解釈してはいけない」
「それではいつまで経っても彼を理解できない」
「私がしたように彼の不安を取り除く努力をすべきだ」

※以下は二郎目線での各章要約（28 章まで）
1 章…冬が終わり彼岸になる。下宿に兄嫁が訪ねてくる
2 章…兄嫁がなぜ訪ねてきたのか、不安で驚きがあった
3 章…兄嫁に家に来ない理由を問われ忙しいからと答える
4 章…兄嫁は兄との関係が思わしくないことを打ち明ける
5 章…兄が兄嫁に酷いことをするのではないかと怖くなる
6 章…父から日曜の朝に下宿に行くという電話がある
7 章…日曜、父が下宿に来て当り障りのない話をする
8 章…父と一緒に上野の表慶館や精養軒に出掛ける
9 章…父に連れられ久々に実家へ行く
10 章…父は家族に内緒で自分を家に連れてきてくれたのだ
11 章…重から兄が家族ともあまり話をしないことを聞く
12 章…父母も兄の心配をし、兄に旅行を勧めることになる
13 章…兄と一番親密な H に旅行を頼むため、三沢の家へ
14 章…三沢に事情を話し、一緒に H の家へ行く
15 章…H に事情を話し、兄との旅行を了承してもらう

16 章…三沢から結婚を勧められる
17 章…H と兄の旅行が決まったと三沢から連絡がある
18 章…三沢に誘われ雅楽を見に行く
19 章…そこには三沢の結婚相手と、もう一人の女性がいた
20 章…三沢はその女性のことを気に入らないかと言う
21 章…三沢とその女性の話をするが、兄のことが気になる
22 章…H に会い、旅行中の兄を詳しく報知してくれと頼む
23 章…兄のことが片付かなければ、心に余裕は出ない
24 章…兄が H と一緒に出発したと兄嫁から電話が入る
25 章…実家に行く。兄嫁は兄に愛想を尽かされたと言う
26 章…重は自分の秘密を知っていると言う
27 章…重の言う秘密とは、自分の結婚問題だった
28 章…兄と H が旅行に出て 11 日目、H から重い封書が届く

※以下は H が二郎に書いた手紙
29 章…広い別荘で兄さんが就寝中なので手紙を書ける
30 章…旅行に出発した日の晩、手紙を書く必要性を認める
31 章…兄さんは常にやっていることと目的が一致しない
32 章…兄さんは人類全体の不安を自分一人に集めている
33 章…兄さんが宗教の道に入るのではないかと考える
34 章…兄さんは死んだ神より生きた人間の方が好きと言う
35 章…兄さんは昨夜も寝られなくて困ったと言う
36 章…兄さんは朋友として君から離れるばかりだと言う
37 章…兄さんは妻に手を挙げたことを打ち明ける
38 章…兄さんは鋭敏な人でとても苦しんでいる
39 章…兄さんは死・気が違う・宗教の 3 つしかないと言う
40 章…兄さんに全てを投げだせば楽になれると告げる
41 章…兄さんは怒った私に神を信頼していないと言う
42 章…兄さんは浜に出て、山に行こうと言い出す
43 章…荒天の中、兄さんは私と山歩きを楽しむ
44 章…兄さんは生死を超越しなければ駄目だと訴える
45 章…兄さんは私を実効的で偉大だと評して涙を流す
46 章…兄さんは私に頭を下げ涙を流すほどの正しい人だ
47 章…兄さんが些事に気を取られ我を忘れるのは愉快だ
48 章…兄さんに絶対を求めるより我を忘れるのを勧める
49 章…兄さんは無欲なお貞さんのようになりたいと言う

50 章…兄さんは一切の重荷を棄てて楽になりたいのだ
51 章…兄さんは自分の妻を悪くしてしまったと言う
52 章…兄さんの頭を取り巻く雲を散らしてあげればいい